

『和歌初心抄』について

日比野 浩 信

—

院政期以降、古歌の理解、作歌の手引きとして多くの歌学書が編まれた。しかし、歌道家の衰退や、より大部・詳細な歌学書への吸収・発展や淘汰などによってか、散逸した歌学書も少なくはないようである。

近年、古筆切研究の進展に伴い、これまで未詳とされてきた古筆切も徐々に特定化されつつあるが、詳らかにできない断簡も少なくはない。それらの中には内容的に歌学書ではなからうかと推測される古筆切も何種か存している。その一方で、目録類などにその書名だけが伝わる歌学書などもある。実際には目録類などに見出せる書名と古筆切としての残欠本文とが結び付けられていないだけの歌学書も存しているのかも知れないが、類似する書名、類似する内容も少なくはない歌学書の中で、書名だけを頼りにその内容を細部に及ぶまで推定したり、あるいは、残存するわずかな本文からその書名を特定することなど容易なことではない。また、歌学書は、殊に歌語や地名を集成した歌学書などは、掲出語の順序や多少、小書の有無、書入れの本文文化など異同も生じ易く、性質上、編者の手によってのみならず享受段階においてさえ補訂が加えられることも少なからず、更には新たな歌学書へと改編されていた可能性さえある。他の歌学書の本文をそのまま利用することも珍しいことではない。このようなことも、一部の残存本文と書名とを結びつけることが困難な要因の一

つとなつてゐる。

稿者がかつて、いくつかの歌学書の古筆切を集成、若干の考察をも試みた⁽¹⁾が、九条教実を伝承筆者とする一葉を、現存する歌学書の中では最も類似する「和歌初学抄」の古筆切として取り扱つておいた⁽²⁾。しかし、それは全くの誤りであり、散逸歌学書「和歌初心抄」の断簡であることが明確となつた。「和歌初心抄」は、他の歌学書などへの引用も認められず、現在のところその全容は確認されていないものの、筆者を源三位頼政と極める二葉の古筆切が志香須賀文庫に所蔵されており、そのうちの二葉には「和歌初心抄下」という書名があることから、その断簡と知られるのである。わずかな本文が残存するのみではあるが、古筆切の中で伝本が現存しない歌学書の書名が明確になることなどは全く以つて稀有なことである。この伝源三位頼政筆切と伝九条教実切をツレと確信するに至つた。これにより、「和歌初心抄」切が三葉存することとなるわけで、前稿での誤りを訂正するとともに、この散逸歌学書「和歌初心抄」について、略述しておきたい。

因に、やはり「和歌初心抄」という書名を持つ歌学書が神宮文庫に所蔵⁽³⁾されているが、こちらは飛鳥井雅親の秘説を伝えたとみられる同名異書であることを付言しておく。

二

まず、志香須賀文庫蔵切のうち、書名のある一葉(①とする)は縦十六・二センチ×横十五・九センチ、もう一葉(②とする)は縦十六・一センチ×横十五・八センチで、元は六半形の冊子本であつたらしい。朱で声点を付す。この二葉は、従来知られていなかったわけではない。「古筆凌寒帖」⁽⁴⁾に掲出されており、

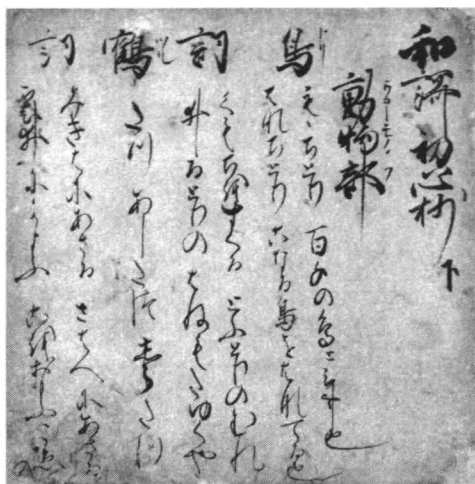
志和謔初心抄(縦一六・四釐/横一六・〇釐)下巻の二葉なり。藤原清輔の和歌初学抄のたぐひにて、初心のための抄物なるが、従来その名知られざるもののごとし。上巻の世に出で、編者の知られむこと望まし。古筆家の極に

「源三位頼政卿」とあれど、大よその時代よりの推定なるべし。

と解説され、また、「古筆切提要」の頼政の項に、

和歌初心抄 卷下 (古筆凌寒帖一四)

との記載がある。「古筆凌寒帖」解説と、稿者の調査による寸法とに若干の違いがあるが、計測した辺の違いなどによるのであろう。書写年代は頼政の時代ならば平安後期となり、「古筆凌寒帖」の解説では「大よその時代よりの推定なるべし」としていることから、その頃の書写とみているのであろうか。そこまで溯るものとも思われないが、頼政の時代からさほど隔たらぬ鎌倉初期頃、中期としても、ごく初期に近い頃とみられそうである。本文は次の通り。



① 和歌初心抄 下

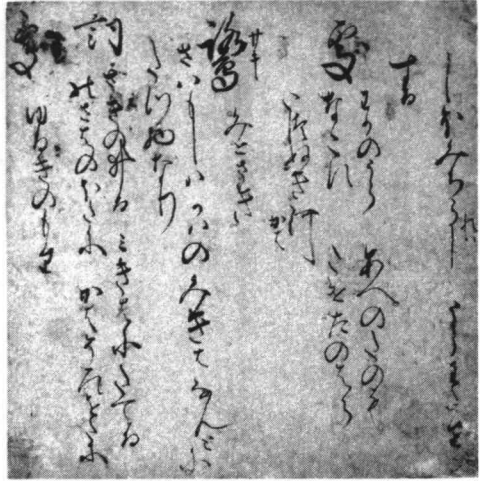
動物部
ウコキモノ

鳥 も、ちとり 百千の鳥と云事也
はなちとり こなる鳥をはなてる也

詞 くもちをすくるとふとりのむれ
ゐるとりのはねもたゆくや

鶴 たつ あしたつ しらたつ

詞 みきはにあさる さはへにあさる
雲井にかよふこをおもふこゑの



②

しほみちらし^{れは} うらわたり
する

處 わかのうらあへのたのも
なこえ たけたのはら

いづぬき河^か

鷺^{さぎ} みとさき

さほもしはかはのみきはなんとに

たつ物なり

詞 ささのゐる みきはにたてる
みさはのほたにかはそひをたに

處 ゆるきのもり

共に鳥類に関する項であり、近接する本文であることは瞭然であるが、②の「しほみちらし」「しほみちくらし」とあるべきであろう。後述。「わかのうら」は、

わかのうらにしほみちくればかたをなみあさべをさしてたづなきわたる⁶

(万葉集 九一九)

あさされば(中略)しほみちくれば あしべには たづなきわたる (以下略)

(万葉集 三六二七)

「うらわたりする」は、

つな手引くなだの小舟や入りぬらん難波のたつの浦渡りする

(堀河百首 一三四七)

「あへのたのも」は、

さかこえてあへのたのもにゐるたづのともしきさまはあすさへもかな

(万葉集 三三三)

「なごえ」は、

…………たづがなく なごえのすげの…………

(万葉集 四一一六)

「たけたのはら」は、

うちわたすたけだのはらになくたづのまなくときなしあがこふらくは

(万葉集 七六〇)

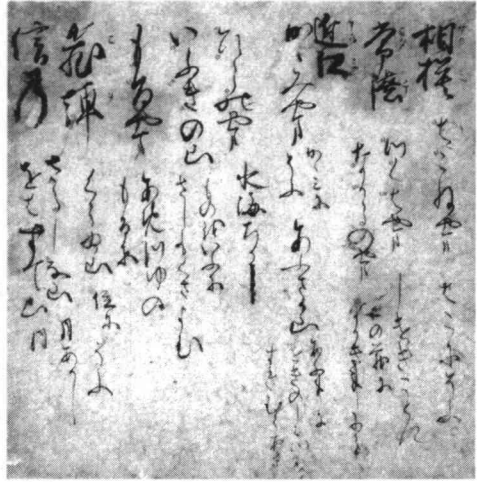
「いつぬきかは」は、

きみがよはいくよろづよかかさぬべきいつぬきがはのつるのけごろも

(金葉集初度本 四五九 二度本・三奏本にもあり)

のように、全て「鶴」に付随して詠まれる歌句・所名であり、内容的に二葉が連続する本文であることがわかる。更に、よくよく観察すると、例えば①の上部「鳥」と「詞」の間に「鷺」字、中程左方「あしたつ」の「た」の左に「あ」字の一・二画目、最終行「雲井にかよふ」の「井」と「に」の間に「み」の弧から横棒辺りが裏写りしており、逆に②の三行目「處」に重なるように「鶴」字の一部が、「處」と「鷺」の間に「詞」の偏の一部が、最終行などは端作りの「和」字の二・三画目辺りが裏写りしている。一見不鮮明な裏写りも、二葉を重ねてみると、①と②とで裏写りと文字の位置とが一致していることがわかる。つまり、①と②は、元々表裏一紙であったことも確認できるのである。

伝九条教実筆切(③とする)は小林強氏の所蔵で、縦十六・四センチ×横十五・九センチ、やはり朱の声点がある(前稿で「朱合点」としたのは「朱声点」の誤)。本文は次の通り。



③

相模 はこねやまはこにそふ

常陸

つくはやましけきことに
なからのやま □の義に
なかし事にも

近江

か、み山

か、みに
そふ
あふさか山
あふ事に
せきのしみつあ
すきむらあり □

ひらの山

水海ちかし

いふきの山

ものをいふに
さしもくさよむ

もるやま

あめつゆの
もるに

飛驒

くらゐ山 位にそふ

信乃

さらしな山 月あかし
をはずて山 同

①②と③を比較してみると、同一の料紙で、その大きさもほぼ同じの六半形である。一面辺りの行数は、見方によって分かれる所であろう。行間に文字が書かれているかのように見られる箇所もあり、文字にも大小入り混じっているが、むしろ、このような書式であることこそが、その共通性ともいえそうである。②の標目の漢字を一行、その下の仮名書は二行であつても割書き、仮名のみを行をそれぞれ一行とみると、九行ということになる。③は国名と地名の書き方が不統一であるが、国名を一行、国名と行頭を揃える地名を一行、その下の仮名書はやはり割書きとみると、これも九行ということになる。①については六行ということになるが、端作りと部類を記しており、本文のみの面とは異なる行取りがなされて

いると考えればよからう。すると、一面あたりの行数も一致することになる。筆跡については、「ね」字が縦の第一画から左斜めに上がって三角形をつくり、鋭角的に下がっている点、「あ」字の起筆が極度に縦に長い点などの共通点が見られる。また、「を(越)」「ゆ」などの字形も類似し、「の」にも類似した形が見受けられ、筆跡も同一と見てよいのではないかと。これらのことから、伝頼政筆切と伝教実筆切をツレとみてよいように思われるのである。すると、前稿において、伝承筆者とその印象から、そして過剰評価を避ける意味もあって「鎌倉後期頃の書写か」としておいた当該の書写年代も、鎌倉の初期から中期頃とみておきたい。わずか三葉のことであり、全内容の極々一部を伝えるに過ぎないことは言うまでもなからうが、伝本の現存しない『和歌初心抄』においては、この三葉は絶対的な価値を有することはいうまでもない。

三

これら三葉の断簡から推測し得る、『和歌初心抄』の内容構成について触れておきたい。

まず巻数であるが、端作りに「下」とあり、「二」「三」のような数字ではないことから四巻以上の構成ではなく、上下二巻もしくは上中下三巻であったはずである。

①②は「動物部」とあるように、大きく分類し、分類に従った項目語を掲げ、簡略ながら釈義を施し、次に「詞」として類語ともいふべき項目語を含んだ歌句や、項目語に付随して用いられる歌句の表現を掲げ、更に「處」としてその歌句(語)と組み合わせるべき項目語に適した所名を掲げる。③は、国別に地名を列挙し、和歌においてその地名に包含させるべき意味合いや、いわゆる添え物のな語句が掲げられている。利用者は、歌語をもとにその使用例、あるいは組み合わせを了解し得るわけであり、その書名の通り、まさに初心者のための手引書となっているといえよう。

さて、「動物部」のような分類は、「和名抄」などにみられるような辞書的分類であるが、現存する歌学書では、範兼の「和歌童蒙抄」、仲実の「綺語抄」、順徳院の「八雲御抄」、上覚の「和歌色葉」などにおいてもなされている。これらの分類を、列挙してみると次の通りである。（日本歌学大系所収本による）

第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一	和歌童蒙抄				
獸部 魚貝部 虫部	鳥部	草部 木部	音楽部 漁獵部 服飭部	武部 伎芸部 飯食部	居所部 宝貨部 文部	人部 人体部	地部	天部 時節					
下		中			上				綺語抄				
動物部 植物部		財貨部	人詞部 居所部	官位部 人行部	神仙部 人倫部	海部	坤儀部 水部	天象部 時節部					
權化 異名	雜物	人倫 人事 衣食	鳥獸 虫魚	草木	国名	地儀 居所	天象 時節		八雲御抄				
	畜類部	居所部 資具部	人倫部	神祇部	時節部 草木部	海水部	地儀部	天象部	通用名言者	和歌色葉			
雜具	人具	畜具	水具	生具	地具	時具	天具	別の詞づかい					

概ねの傾向は一致しており、「和歌初心抄」もこれらの傾向から大きく逸脱していたとは思われず、類似の分類によって構成されていたであろう。諸歌学書において、歌語掲出部の始めは総じて「天象」であり、「動物部」がその冒頭に位置することはない。「動物部」を「下」巻としているうえは、もう一巻、これ以前に「天象」をはじめ他の項目を掲げた巻が存したと考えるのが妥当であろう。「和歌童蒙抄」「綺語抄」「和歌色葉(通用名言者)」では、動植物の部は末尾近くに置かれるが、「八雲御抄」「和歌色葉(別の詞づかい)」のように、「人倫」などより前に置くものもある。後者のごとき分類順であれば、歌語全体を二分した、その後半の始めが「動物部」であったとしても問題はなからう。少なくとも二巻が、歌語掲出に当てられていたであろうことが推察されるのである。

ただ、注意すべきは「和歌初心抄」には③のような所名を掲げた部分が存在していることである。前稿で③に関して、「和歌初学抄」の「所名」を基とした「国名別の歌枕書としての改作」の可能性を示唆した。「歌枕書」とした推測は誤りであったが、一書であるか一部であるかの違いはあれ、「国名別歌枕部」としての改作の可能性は残されているように思われる。殊に平安後期以降、歌枕への関心が強まっていったことは否定できまい。「五代集歌枕」を嚆矢として、後に名所歌集が多く編まれたことは周知の通りであり、時代が下るほど名所歌集の類は多く伝存しており、不詳の名所歌集の断簡なども少なからず存している。ただ、「和歌初心抄」がいわゆる名所歌集や歌枕書の類ではないことは①②の断簡からも明白であり、その一部が「所名」に当てられていたことになる。③で見られるのは「山」のみであるが、他にも「原」「野」「川」「海」「嶋」等々が存していたはずである。これらから推察するに、「所名」は少なからぬ分量を占めていたと思しい。しかも歌語掲出の巻に混在していたとも考えられないことから、「和歌初心抄」では、名所部(歌枕部)が一巻分独立していたということになりはしないだろうか。

以上のことから、「和歌初心抄」は、名所掲出の上巻、歌語掲出の中・下巻の、三巻から構成されていたと推測しておいてはいいかがであろうか。

四

次にその内容を他の歌学書と比較しておきたい。

まず、③については前稿で『和歌一字抄』の断簡として扱ってしまったように、『和歌一字抄』とかなり類似しており、密接な関連がうかがわれる。地名を掲げる主だった歌学書としては、『奥義抄』『和歌初学抄』『八雲御抄』『和歌色葉』などがある。なお、『奥義抄』にも「出萬葉集所名」として地名の掲出があるが、典拠を『万葉集』に限定することもあり、「はこね」「くらゐ」「ひら」の山が一致するのみであり、掲出順序も異なり、直接の影響関係はないもの見てよからう。

『八雲御抄』は『和歌初心抄』に掲出されるすべての地名を掲出するが、『万葉集』の地名とその他の地名とを分けていることもあって、掲出順序なども全く異なり、やはり直接の影響関係は考えられない。そこで『和歌初学抄』と『和歌色葉』との比較をしておく^⑦

和歌初学抄	和歌色葉	和歌初心抄
<p>しつはたやま あやにしきにそふ はこねやま はこにそふ をとつれやま 人のそとにそふ つくはやま しけきことによむ つくはねともいふ なからのやま さ、なみやともいふ なかきことにそふ</p>	<p>しつはた山 はこね山 おとつれ山 つくはね山 つくわねともいふ なからの山 さ、なみともいふ</p>	<p>はこねやま はこにそふ つくはやま しけきことによむ なからのやま □の義に なかき事にしる</p>

<p>か、みやま けふそみるとも とこのやま いさやかはあり <small>とこにそふ</small></p> <p>あふさかやま 人にあふにそふ <small>し水又関あり</small></p> <p>ひらのやま たかねともいふ いふきのやま さしもよむ <small>ものをいふにそふ</small></p> <p>もるやま あめにそふ</p> <p>くらゐやま いやたかねのみねあり <small>六位の笏木切也云々</small></p> <p>さらしなやま 月めてたし</p> <p>をはすてやま 同上</p> <p>うらこのやま もみちなどによむへし</p>	<p>か、みのやま とこの山 くさき河あり</p> <p>あふさか山 しみつあり <small>せきあり</small></p> <p>ひらの山 たかねともいふ いふきの山 さしも草あり</p> <p>もる山 <small>いやたかの峯あり</small> <small>六位の笏の木切之云々</small></p> <p>さらしな山 月めてたし</p> <p>おはすて山 同</p> <p>うらこの山</p>	<p>か、みやま か、みにそふ <small>あふ事に</small></p> <p>あふさか山 せきのしみつあり <small>すきむらあり</small></p> <p>ひらのやま 水海ちかし</p> <p>いふきの山 ものをいふに <small>さしもくさよむ</small></p> <p>もるやま あめつゆのもるに</p> <p>くらゐ山 位にそふ</p> <p>さらしな山 月あかし</p> <p>をはすて山 同</p>
--	--	---

小書部分にはややや違いがあり、「かがみやま」「ひらのやま」「くらゐやま」のように全く異なっているものもあり、「ながらのやま」「あふさかやま」「さらしなやま」のように若干異なるものもあるが、異書としては似すぎているほどであり、その関連は否定できない。「和歌初心抄」は記事がより簡略であり、「もるやま」「くらゐやま」の小書のごときは地名と小書の内容とが直接的に結びつき易い内容であるといえそうである。「和歌初心抄」の依拠した資料として「和歌初学抄」があったことは認めてよいのではなからうか。ただ、このように「和歌初学抄」のみと簡単に結び付けてしまうのは問題がないわけではない。「和歌色葉」は、清輔の「奥義抄」「和歌初学抄」をそのまま利用している箇所がかなりの分量を占

めており、当該箇所も小書の違いのみで「和歌初学抄」とほぼ一致している。すると「和歌初心抄」は、「和歌初学抄」をそのまま利用した「和歌色葉」に依拠して構成されている可能性をも否定しきれないことになるからである。しかし、「和歌色葉」「和歌初学抄」に依拠していることが明らかであること、「和歌初学抄」「和歌初心抄」という名称が類似しているところから、「和歌色葉」よりも「和歌一字抄」との関連のほうが蓋然性が高そうである上に、「和歌色葉」にはない小書が存しており、「和歌色葉」と「和歌初心抄」との間には直接的な影響関係を認めずともよさそうである。また、「和歌初学抄」の中には、「あふさか山」の小書を「人ニアフニソフ セキ、シミヅアリ」のように記している伝本、「くらゐ山」の小書を「雨、しぐれにそふ」としている伝本もあり、このような本文を持つ「和歌初学抄」に依拠したとすれば、「和歌初心抄」での「せきのしみつあ(り)」「あめつゆのものに」という記述が導き易いように思われる。このことから、「和歌初心抄」の所名部は、「和歌初学抄」に大きく依拠しているといえそうである。

では、歌語掲出箇所ではいかがであろうか。所名部の近似に比べると、かなり相違しているとさえいえる。「和歌初学抄」で「鳥」「鶴」「鷺」に関する記述は、「秀句」の項の

鳥 ふるす はね け はく、む かひこ すたつ かへる ひな とふ なく

いまはとてとひわかるめるむらとりのふるすにひとりなかむへきかな

と、「物名」の項の

鳥 はるとり ひなとり むらとり も、ちとり も、とり あざとり はなちとり みやまとり

鶴 あしたつ たつ くらつる しらつる まなつる

鷺 しらすき あをさき みとさき かさ、き あまさき

であろう。「秀句」に掲げられる語句は、この項目の始めに「又哥はものによせてそへよむやうあり。なそらへ哥といふにや」とあるように、対象となる語に添えて詠む、付随する語を単語単位で掲出するが、「和歌初心抄」では歌句の表現

を掲出しており、付随する表現がより固定化された、やや時代の下の傾向とみることができよう。「物名」の項では、その語を含む熟語的語句、種類を掲出しているが、「和歌初心抄」ではその数がかなり少ない。何より、「和歌初心抄」では、これらを一括したような形式で構成されていることになる。「八雲御抄」は「和歌初学抄」をも利用していることが「初学」などの注記から明確であるが、その巻第三枝葉部に、「秀句」「物名」にあたる語句を混合した形で、更に多くが掲出されている。「和歌初心抄」では、標目語の直後に「物名」にあたる語を掲げ、「詞」と「所」を小項目として立項し、整理・然としている点特徴的である。「八雲御抄」が「集成・拡大」の傾向であるとすれば、「和歌初心抄」などは、「整理・改編」の傾向であるといえはしまいか。ただ、これはあくまで形式的な問題であり、内容的には、ここに見る限りは「和歌初心抄」が必ずしも「和歌一字抄」のみを基としているとは断言はできない。さりとして「八雲御抄」からの抜粋などでもなく、現存する歌学書で、その影響関係が明確に指摘できる歌学書は見当たらない。

五

そこで、内容を検討しつつ、その成立についても触れておきたい。

ところで、当該断簡は「和歌初心抄」の原本たり得るのであろうか。まず、その点を確認しておく。結論から言えば、当該断簡は「和歌初心抄」の原本ではなからう。それは、次のことから考えられる。まず、①の「鶴」の行「しらたつ」。「したつ」のようにあった「し」の上から「しら」と書き直しているのは誤りに気付いて正したのであろう。ただし、「しら」と書いたものの「ら」とはつきり認識できないような字形になってしまったがための書き直しかも知れず、必ずしも誤写とは断言すべきでないかもしれない。②のはじめ「しほみちらし」とあるが、「しほみちらし」^{れは}「しほみちれは」ともに用例を見出し得ないだけでなく、歌句としても不審である。

……しほみちくれば あしべには たつなきわたる……

(万葉集 三六二七)

おきべよりしほみちくらしからのうらにあさりするたづなきてさわぎぬ

(万葉集 三六六四)

のように「しほみちくらし」「しほみちくれば」とあるべきであり、「く」の誤脱であろう。誤脱がありながら類似の歌句を示すために傍記するなど、原本では考えられまい。また、①の「鳥」の項で

詞 くもちをすくるとふとりのむれ
あるとりの はねもたゆくや

のようにかかれており、ここには四つの「詞」が掲げられているようにみえる。しかし、「とぶとりのむれ」という七字句の用例は見出せない。また「あるとりの」は「くにある」などとして、ある場所に、あるいはある状態で「鳥が存在している」ことを詠むのに用いられているのが一般である。ここで考えられるのが枕詞としても使われる「とぶとりの」という五字句と、主だった歌字書で取り上げられることの多い、「後撰和歌集」の源重之の歌、

なつかりの玉江の蘆をふみしだきむれある鳥の立つ空ぞなき(二一九)

にみられる「むれあるとりの」という用例である。『和歌初心抄』の記述は、「とぶとりの」「むれあるとりの」とあるべきであろう。このような書写形態は、原本では起こり得まい。

当該断簡が鎌倉前期、遅くとも中期以前の断簡であるとすれば、『和歌初心抄』の成立はそれ以前でなくてはならない。これが転写本となれば、更に溯る可能性さえ存することになるが、他文献での記述も(目録類に類似の名称が見られなくもないが、これについては後述する)、引用も認められない『和歌初心抄』では内部徴証による他ない。そこで、『和歌初心抄』に見られる歌句を検討してみたい。一字二字程度の違いの、非常に良く似た歌句もあるが、『和歌初心集』の記述にある歌句そのものの用例を検出しておく、先に掲げたものの他に、次のようなものが見出された。ただし、

いまはとてこしぢにかへるかりがねははねもたゆくやゆきかへらん(金葉集 二八)

のように、同じ歌句を含む歌がある場合でも、「鶴」「鷺」などの標目語との組み合わせで詠まれていないものはその用例とは認めないこととした。

蘆まわけみぎはにあさる しら鷺の跡もきかくれぬうす氷かな
(延文百首 二一六〇)

もえわたる野辺のみどりをまつほどやさはべにあさる あをささぎのこま
(為忠初度百首 七五)

さは水になくたづのねやきこゆらん雲あにかよふ人にとはばや
(清輔集 四〇八)

和歌の浦に八十あまりの夜の鶴子を思ふ声のなごか聞こえぬ
(増鏡 一八六)

つな手引くなだの小舟や入りぬらん難波のたづの浦渡りする
(堀河百首 一三四七)

ささのゐるまつばらいかにさわぐらんしらはうたてさととよむなり
(金葉集 五五六)

たかしまやゆるぎのもりのさきすらもひとりはねじとあらそふものを
(古今和歌六帖 四四八〇)

『万葉集』のような古い用例もあったが、ここに掲げたように古い用例が見出せないものが少なくない。『延文百首』や『増鏡』の為世詠が最も古い用例とするならば、『和歌初心抄』の成立は南北朝以降ということになってしまふ。しかし、当該断簡の書写年代はそこまで下るものではないことは、述べたとおりである。歌学書の中には、古写本の出現によりその成立を溯らせて考える必要が生じた『和歌題林抄』のような例もある。ここでは古い用例が見出せていないだけと考えるべくより仕方がないことにならう。あるいは、歌学書への記載がきっかけとなつて、この場合は『和歌初心抄』のような初心者向けの歌学書に導かれての詠が存することもあり得ないことではなく、後世に与えた影響の一つとして考慮する必要があるのかもしれない。いずれにせよ、鎌倉初期から中期頃の断簡が存する以上、これが下限であり、その成立を繰り下げることはできない。では、いつの時代まで溯れるであろうか。『和歌初心抄』の辞書的分類や、その形式は院政期以降の歌学書に普通に見られるものである。ここで注意したいのが、現時点で確認できた用例に『堀河百首』『金葉和歌集』といった院政期の歌書を出典とする用例、また、『堀河百首』や『延文百首』『為忠初度百首』といった百首歌や『古

今和歌六帖』のように題詠が想起される、つまりは題詠的な詠み振りの歌が用例として存在することである。当然、断簡の書写年次以降の用例をその出典と見なすことはできず、あくまで共通性が指摘できるといった程度の問題であるが、このような出典が重なるのは単なる偶然であろうか。「金葉集」の歌風が革新的な新風であることは、今ここに殊更に述べる必要もないことであり、「堀河百首」が後世に与えた影響の大きさも周知のごとくであろう。ただ、初心・初学の者が初めから新奇を求めて歌を学ぶというのは考え難く、「和歌初心抄」が和歌の新風を促すために作られたものとも思われない。それはむしろ題詠への意識が大きく関与しているといえるのではなからうか。鎌倉期には「堀河百首題」で歌を詠むことは初学の歌人にとって必須の事柄となり、題詠は歌人にとって当然の詠作条件であった。ここから「和歌初心抄」を、院政期以降の、初心・初学の者が「堀河百首題」などによる題詠を試みる事が定着していた頃の成立とみることはあながち無理なことではあるまい。また「八雲御抄」の影響が認められない点、このような大部な集成書の流布以後に編まれる必要性が感じられない点から、「八雲御抄」以前に成ったものとは考えられないだろうか。そこに断簡の書写年代を考慮すると、「和歌初心抄」は鎌倉初期頃に成立した歌学書であるとみることができるとはなからうか。当該断簡は、その成立からさほど隔たらぬころに書写されたものといえよう。

ただし、掲出される歌句の用例と断簡の書写年代とが抱える時代的な矛盾に対して、今は明確な判断を下すことができないのも事実である。用例の検出と、一葉でも多くの断簡の博搜とが重要な課題となることはいうまでもない。

六

次に、「和歌初心抄」の編者についても一応の検討は加えておくこととする。

「和歌初心抄」は、その名称の示す通り、初心者にむけての手引き的歌学書であつたらしいことは推察されるが、先に引

⑨ 用した「古筆凌寒帖」が「編者の知られむこと望まし」とするようには、編者については不詳である。しかし、「扶桑拾葉集」に、「和歌初心鈔序」という一文が収録されている。その全文を次に掲げておく。

和歌初心鈔序

同

抑和歌は天地ひらけしよりこのかた、我朝のもてあそひ、鬼神をも心を和らけ、男女夫婦のなかたちとなり、田夫野人うらかつ山かつ、有情非情鳥類畜類までも、みな歌にもる、事なし、されはたま／＼人と性をうけて、歌のさまを聊も辨へざるへきは、鬼畜木石に異ならず、はかなき月日を、くり露の命をやしなはむとて、罪をつくりはかなきのみにて一期を暮し、花のすかたもいつしかうつろひ、たるちめのなてし黒髪も、しらかの雪となりてむなしくなれり、相かまへて／＼よそのやうにおもひ給はず、よろつの憐の心に何の学ひをも、急きいそかるへき事にや

作者「同」は、その前の「宮河歌合跋 同」「家隆卿にこたふる文 同」「長綱百首の端に記せる辞 同」と同様、「顕註密勘跋 藤原定家」を受けるものであり、この「和歌初心鈔序」の作者をも藤原定家としていふことになる。この序と、断簡「和歌初心抄」の本文とが同一作者の手による同一書であるか否かも検討せねばなるまいが、わずか三葉の断簡からは確かな論拠は求め難く、俄かには判断し難い。「歌をさま」を「辨へ」ない者は「鬼畜木石に異なら」ないとまで断じて憚らないのは、例えば「和歌初学抄」の序文が作歌の心得や手引きと言つた内容であるのとは大きく異なり、作歌に対する具体的記述などではなく、人として早急に歌を学ぶべきであるとさえいふように、あくまで作歌の必要性を説くといつた内容である。既に作歌に携わる一角の歌人に向けられたものではなく、まだ「歌のさま」を「聊かも辨へ」ていない、いかにも初心（「初学」にまでも至つてはいないであろう）者に向けて書かれた書物の序文らしくもみられ、その点は「和歌初心抄」という書名と抵触するものではない。現段階ではその断定は困難ではあるが、否定する根拠も見出だし得ず、一先ずは同一書の序文の可能性があると考へておきたい。

「扶桑拾葉集」所収の一文が「和歌初心抄」と同一書であり、その序文であるとするならば、序文のみとはいへ、断簡

以外にその本文の一部を伝えるものとして、重要であることは言うまでもないが、同時に編者を知る唯一の手掛かりともなっており、それが藤原定家ともなれば、看過することはではない。「和歌初心抄」と関連のありそうな書名を『私所持和歌草子目録』⁽¹⁰⁾にも見出すことができるが、その「口伝」の項に

初学抄 初心抄 初心初学抄 和歌初心集

といった、よく似た書名が列挙されている。「和歌初心抄」という書名は見出せないものの、「初学抄」などは藤原清輔の『和歌初学抄』をいうのであろうか。この中で「初心抄」あるいは「和歌初心集」のどちらかが『和歌初心抄』を指している可能性は皆無とはいえないのではなからうか。『私所持和歌草子目録』が冷泉家に伝わる歌書の目録であれば、定家の著述が伝来していても何ら不思議はない。ただ「私所持和歌草子目録」は、既に指摘のある通り、俊成・定家の著述であるからとて、著者名を記すこともなければ、それを特別扱いすることもない。⁽¹¹⁾他の目録類などにも、あるいは何らかの記述が見出だされるかもしれないが、現在の所、管見に触れていない。「和歌初心抄」の編者に関わる記述のある文献は、今のところ「扶桑拾葉集」が唯一といえそうである。

以下は、その可能性を期待しての推測ではあるが、先に「和歌初心抄」の成立を鎌倉前期頃ではないかと推測しておいた。すると、編者もその頃に活躍を認められる人物となり、「扶桑拾葉集」が「和歌初心抄」の作者を藤原定家とするように、「和歌初心抄」の編者を定家とすることに、時代的な矛盾はないことになる。仮に定家の編であるとすれば、初学期に堀河百首題を学んだ定家がそこからの表現を用例として掲げることも自然な結果であろう。現存する定家の歌学書には、和歌そのものを重要視する秀歌撰的歌学書が多いのに対して、これは手引書的・実用的な歌学書として全く性質を異にしていることは、少なからぬ意味を持つ。秀歌撰的歌学書が後の傾向であるとするならば、このような傾向は自らの学習とその成果としての編纂物であり、若年期の傾向であると位置付けることもできるのではなからうか。『五代簡要』なども、一首全体や、ほぼ一首に近い掲出の仕方が多いが、歌句掲出を中心としており、『和歌初心抄』と秀歌撰的歌学

書などの過渡期的な存在であるとみられるようになるのかもしれない。「和歌初心抄」上巻にあたると推察した名所の掲出についても、定家が名所に対して少なからぬ関心を示していることが「古今名所」「源氏名所」などの存在からも明らかであり、興味深いところとなろう。

しかし、時代の下る『扶桑拾葉集』が、どこからこの一文を見出し、収録したのか、その点も不明瞭であり、直ちにこれを肯定するわけにもゆくまい。これらはいくまで「扶桑拾葉集」所収「和歌初心鈔序」が、「和歌初心抄」断簡と同一書であり、編者が序の執筆者と同一とみた上で、その記述が絶対的に信頼するに足ると認められた場合」という仮定的な前提の上でのことであり、なおも検討が必要である。「扶桑拾葉集」に「和歌初心鈔序」という一文が所収されていることを指摘し、後考を俟つこととしたい。

七

現在知られる、「和歌初心抄」に関連する資料を掲げ、若干の卑見を述べた。が、成立や作者などを確定するには至っていない。伝本を博搜する必要があるが、現代においては余り希望的にはなれない。しかし、断簡であればその出現も皆無とはいえない。一葉でも多くのツレの断簡が見出されることが鶴首される所以であり、それによって少しでも内容が明らかになることを切に望むものである。

「和歌初心抄」は、数多く作られた作歌の便に供するための手引き書的な歌学書の一つであろうが、後の時代からみれば、他の散逸歌学書のように、吸収・淘汰される運命にあつた歌学書といえるのではなからうか。

- (1) 「[和歌初学抄]の古筆切」(愛知淑徳大学国語国文第十九号 平成八年三月)、「[奥義抄]古筆切の検討―その本文と流布―」(和歌文学研究 第七十三号 平成八年十二月)、「[袖中抄]([頭秘抄]の古筆切)岡崎女子短期大学研究紀要 第三十三号 平成十二年三月)、「俊頼龍腦の古筆切について」(愛知大学 一般教育論集 第十九号 平成十二年九月)、「五代集歌枕の異文―古筆切の検討から―」(愛知大学国文学 第四十号 平成十三年一月)
- (2) 「清輔関連歌学書の古筆切について―付・清輔集の古筆切―」(平安文学論究)第十五輯 平安文学論究会編 風間書院刊 平成十三年一月
- (3) 外題「和歌初心鈔」全、内題「和歌初心鈔」。縦二四・五センチ×横一七センチの袋綴一冊。墨付二十五丁。二十二丁裏に本與書が「右此書者從將軍家御尋飛鳥井雅親ノ脚即注進之尤秘説也不可有他見而已ノ臘月上旬 在判ノ右此本飛鳥井中納言宋世之以御自筆ノ全書写畢相構云々不可有外見者也可秘々々」のようにある。この後、二十五丁表まで「或本云」という記述が続き、「干時嘉永六年丑十月之頃於ノ大宮川殿御秘書謹而写之畢ノ芝原平恒清(花押)」、更に裏表紙見返しに「此一本書秘説也ノ他見之者不可有也」とある。
- (4) 佐佐木信綱編 昭和三十一年十一月 竹柏会刊
- (5) 伊井春樹氏・高田信敬氏編 昭和五十九年一月 淡交社刊
- (6) 和歌の引用は新編国歌大観に拠った。「金葉集」については二度本を基準とした。
- (7) 「[和歌初学抄]」は天理図書館善本叢書「平安時代歌論集」所収本により、宮内庁書陵部蔵本、志香須賀文庫蔵本、寛文二年版本、天和四年版本などを参照した。「和歌色葉」は、静嘉堂文庫蔵本(古辞書叢刊)により、上野本(「上野本和歌色葉」黒田彰子氏編著 昭和六十年七月 和泉書院刊)を参照した。
- (8) 「[和歌題林抄]」は、これを増補した「種心秘要抄」序の「ちかき世に一条禅閣あつめをかる、和歌題林抄」という記述から、一条兼良の著作とされていたが、吉田兼好を伝承筆者とする専修大学蔵の存在から、南北朝期の成立と考えられるようになった。なお、「[和歌題林抄]」には、後光厳院を伝承筆者とする古筆切も現存しており、この考えは更に補強されることになる。伝後光厳院筆「[和歌題林抄]」切については、機を改めて紹介することとした。
- (9) 明治三十一年九月刊の活字版による。ただし、若干の書写本をも、国文学研究資料館のマイクロフィルムなどによって参考に

した。

(10) 冷泉家時雨亭叢書『中世歌学集 書目集』(平成七年四月 朝日新聞社)による。

(11) (10) 解題。

本稿を成すにあたり、ご高配ご教示賜った久曾神昇氏、小林強氏、田中登氏、久保本秀夫氏に衷心御礼申し上げます。